

この課題は、国語、算数、理科の各教科共通の課題であると言えます。自分の力でまとめの文を書き上げる活動を意図的に組み込んだり、日ごろの授業の振り返りにおいて、視点を与えて取り組んだりするなど、指導者が意図的に取り入れていくことも対策の一つと言えます。

また、児童生徒が互いの考えを交換する機会を多く位置付けることで、互いの意見を尊重し理解する力を育成すると同時に、書く力にもつなげることができると考えます。

### ■読むこと・表現すること

各教科とも、多くの情報から必要な情報を読み取ったり、取り出したりして考察する問題が出題されています。表現の効果を考え、読み取る問題、示された解答方法を自分の言葉を使つて的確に表現する問題、実験の結果を自分の考えを交えながら表現する問題など、読み取る力と同時に表現する力が試される問題に課題があると言えます。

この力は先に述べた「書くこと（書く能力）」にも

大きく関わってきます。指導者が、日ごろの授業の中で、学習指導要領の各領域における育成すべき力を関連付けながら、工夫した学習活動や授業展開を意識することもこれらの力の育成につながると思います。

## より一層の推進

### ■興味関心が生きる授業づくり

小学校では全ての教科でその必要性や重要性など、教科に関する興味関心は高い傾向にあります。また、中学校では、教科によっては肯定的回答が低い教科もありましたが、全体的には教科に対する興味関心が上昇傾向にある状況です。

小学校では高い教科に対する興味関心が、「教科学力」にも現れているという見方もできます。一方、中学校では「教科学力」には大きな課題が見えたこの度の結果ではありましたが、他調査では全国値との差はあるものの、経年の推移では徐々に成果が見られる部分もあります。

昨年度の課題としてもあげられている「児童・生徒

の興味関心が、学習への意欲や学力の定着へとつながる授業づくり」についても、引き続き取り組んでいくことが必要と考えます。

### ■ふるさとキャリア教育の推進

地域や社会への関心に関わる質問項目では、小学校、中学校ともにほとんどの質問項目で全国値を上回っています。特に、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがありますか」という質問項目に対しては、肯定的な回答が、小学校では全国値を30ポイント近く上回り、中学校では10ポイント近く上回っています。

町では、地域との連携や地域人材の活用、保小中、さらには高校との連携など、積極的にを行い、コミュニケーション・スクールと地域学校協働活動の一体的推進による、地域とともにある学校づくりを進めています。

また、「ふるさとキャリア教育モデル事業」のモデル地区としての取り組みを進めています。小学校では、ふるさとキャリア教育を研究の柱に据え、子どもたちが自分たちの地域で、地域



のものや人にたくさん触れることを通して、地域を愛する子ども、自分の生き方を見つめることのできる子どもの育成をめざした実践を重ねてきました。

令和5年4月の日野学園の開校に向け、今現在行っている校種間・異校種間連携をベースとしたスムーズな移行をめざすと同時に、ふるさとキャリア教育の推進にもより一層力を入れて取り組んでいきます。

## 今後の取り組み

■学ぶ意欲が「わかる学び」につながる授業づくりをめざします。

■自分の考えや思いを整理し、的確に書くことのできる活動の確保や時間の設

定、展開の工夫など、各教科でつけた力がさまざまな場面で活かされることをめざします。

■「めあて・まとめ・ふりかえり」を意識した授業改善を図ります。

■必要な情報を取捨選択し、効果的に活用するとともに、自分の考えを的確に表現できるような機会を設けた授業づくりに取り組みます。

■タブレット端末をはじめ、ICT機器を効果的に活用した授業づくりをめざします。

■全国学力・学習状況調査のみならず、他調査や日々の学習状況の分析等とおして、より一層の児童生徒理解や学力の定着をめざします。

■家庭と連携し、学習習慣や、家庭学習のより一層の充実をめざします。

■保小中、さらには日野高校との連携をこれまで以上に密に行い、工夫した特色ある取り組みを進めるとともに、地域の人材や素材を有効に活用した、地域とともにある学校づくりに努めます。

## 誰もが自分らしく 生きていくために



人権啓発講演会及び  
第47回日野町人権・同和教育研究集会

### 【人権啓発講演会】

演題：「コミュニケーションの大切さ  
～何でもできる不幸せもあれば、何でもできない幸せもある～」  
講師：森 裕生さん（舞台パフォーマー）

## theme 1 “人権尊重のまちづくりをしよう” 人権啓発講演会

### 世界で唯一の

### 脳性まひコミカルマジシャン

11月25日、町文化センターで、人権啓発講演会及び第47回日野町人権・同和教育研究集会が開かれました。

講演会では、舞台パフォーマーの森裕生さんが、「コミュニケーションの大切さ」何でもできる不幸せもあれば、何でもできない幸せもある」と題し、講演を行いました。

障がい者として生きてきたこれまでの体験、世界で唯一の脳性まひコミカルマジシャンとしての活動、また、そこから見えてきた他者とのコミュニケーションの大切さについて、参加者に語りかけました。

森さんは、2歳のときに脳性まひによる四肢体幹障害と診断され、身体障がい者となります。しかし養護学校には入学せず、地域の小学校へ入学。「障がいがあるなしに関わらず、友人たちは自然体で接してくれ

た。言葉を交わすだけでなく、『自然体で付き合うことが、わかりあえるということ』なんだ」と、学校の同級生から学んだそうです。

中学3年生になると、人生が一変。ひどいじめに合い、一度は命を絶つことを考えます。しかし、森さんは持ち前の負けん気の強さで、大人になって見返してやる！と、困難を乗り越えていきました。

そして、高校を卒業し就職後、森さんに転機が訪れます。とあるマジックショーを観た後、これだ！と思ったそうです。「笑われる」のではなく、障がい者が健常者を「笑わせたい」という思いが、森さんを世界で唯一の「脳性まひを持つコミカルマジシャン」にさせたのです。

### 「できない」ことが 人と関わるきっかけとなる

マジシャンとして活動するようになった森さんは、その後、とある親子と暮ら

すようになります。そこで気付いたのは、「何でもできることが幸せとは限らない」ということ。森さんは、「私にはできないことが多いけれど、その分、他の人と関わるができる。できないことがあるから、相手とのコミュニケーションが生まれる」のだと話します。

森さんは、時折ユーモアを交えながら、「コロナ禍で、誰も彼も大変な時代になった。大変な時代だからこそ、小さくても大きくても、皆さんには「夢」を持つてほしい。私の今後の夢は、ポッチャ競技でパラリンピックに出ること。まだまだやりたいことがたくさんあるんです」「生まれ変わったも、もう一度両親のもとに生まれたい。私にとって、脳性まひは神さまからの贈り物だから」と、講演を締めくくりました。

最後は、観客に向けて見事なマジックショーを披露し、会場を盛り上げました。